

槐 かい

岡井省二創刊

平成30年9月号

平成三十年九月一日発行 第二十八卷第九号 通巻第三二七号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



背水の陣

高橋将夫

夕立の行く末見ゆる展望台
父の日やともかく話だけは聞く
四次元の丸い世界にゐる金魚
滴りの一滴ごとの潔さ

さざ波が遡上してゆく夏の川
風鈴の音色に回る土星の輪
神々も時には掛けるサングラス
背水の陣の後ろは夏の川
芭蕉布や時の流れに洗はれて
今生の終りは夕焼けのごとく
（以上「俳壇」7月号より）
発心はラムネの栓を抜くごとくし

槐安集

水野恒彦

夜明けつつ霊光つよし神の瀧
ひと夜経てなほ夢幻なる合歡の花
声あげて生きとし生けるもの万緑
たましひの夜鷹のこゑの森深く
夕虹の環わの中にある虚舟かな

加藤みき

皺などは気にせずやはり麻衣
むらさきの靄一面や桐の花
真つ白き開衿シャツや夏期講座
卯波津波大波小波大海原
頭に胸に玉砂利の音青嵐

中島陽華

青葉風エルメスの鞍撫でとほる
ちりめんのたふさぎ想ふ夏はじめ
ほいほいと作務衣脱ぎ捨て菖蒲湯へ
一八や木遣り唄うてしづしづと
母は許がに考の古椅子土用あい

竹内悦子

絵心経の鼻舌身意水の月
螢袋覗いてゆきし羽音かな
空色の産着届くや立葵
西の畑刈られてゐたる蒲の鉾
逢引は一夜孔雀仙人掌一輪



雨村敏子

真夜に聞く梅雨の音なり海馬まで
濤音やむかしのいろに枇杷熟るる
幾百の鬼灯の赤鳴りにけり
歳月をとり出すやうに虫干す
紫陽花の銀河のいろに開きける

本多俊子

夏の海面影さがす風の音
星涼し束ねてしまふ父の文
白玉を影のごとくに掬ひけり
古き世の土鈴ひびけり天炎ゆる
墓声を出さねば失せてゆく

近藤喜子

己が骨さがし漂ふ海月かな
花栗や仰ぐ視線に毒すこし
ハライソに舞ひ上がりたる鳳蝶
大揺れの山うたふなり青嵐
ハイタッチしたき夏うぐひすの空

瀬川公馨

コントラルトの雨音なりき走り梅雨
堪忍袋の破れて泰山木の花
夏の夜はともかくエスペランティスト
団なして茅花の絮の遊行かな
辞儀かへす小判草なりジャンプ傘

柳川 晋

子子の海の響きを懐しみ
昭和製最新型の扇風機
美酒に虹の女神の微醺かな
妖精^{ゴリ}の山市を見てはなりませぬ
短夜の端から端へ暴走す

熊川 暁子

振花の律儀な振れ具合かな
更衣して生き方をデザインす
妣の手のぬくさは今も走馬灯
首つたけの重さ計れず花あやめ
あぢさゐの毬一つづつ伏魔殿

寺田 すす江

万歩計横目にしたりかたつむり
百合の花いのちの賛歌謳ひあぐ
まだ旅の続きなりけり更衣
あたらしき朝になりたり蜘蛛の糸
夏至曇り閑かにひと日暮れにけり

岩下 芳子

きのふまでどこにゐたのか墓
西日さすサッカーボールの影を蹴る
箒目や四方正面立葵
仰のけば梅雨満月の雫かな
和楽路屋の地図拵げゐて祭笛

有松洋子

ピアス光らせ人魚がつくる白夜かな
手に享くは軽き影もつ合歡の花
流るるは人心なれや梅雨鴉
草取の根に強弱のいのちあり
生くるとは翳りもつこと白牡丹

岩月優美子

木下闇抜けて虚空へ手を伸ばす
妖と咲く月下美人の刹那かな
白南風やプラス思考へ舵を切る
宿命に鳴かずをれぬ蟬時雨
ひらめきは何処に失せたか墓

近藤紀子

葉桜の堤の長し母若し
透きとほる白魚に黒き眼かな
風を通す淡竹草履や祖母のこ糸
梅雨しとど用あり顔の猫が行く
手をとりにてゆすらうめ握らせくれし

竹中一花

立山の谿の匂ひや鱒の鱗
硝子戸に守宮の手足弥勒堂
木洩日を肩にふらここ空へ漕ぐ
行道の門に土蜘蛛囀を張れり
浜木綿や竹馬の友の土佐訛

前田美恵子

世継なき天守に立ちし旱星
利かん坊の泣き疲れたる油照
雨乞や神の力の見せどころ
ペーロンの舳先それぞれ風を持つ
兵児帯に団扇とはこれまた粋な

中田禎子

漆絵の精の抜け出す梅雨の月
天上に千手観音女郎蜘蛛
地震あとのガラスのビルや日雷
磐座へ槐の花の盛りかな
紫陽花の光を吸うてをりにけり

吉田順子

プリズムを内に秘めたる四葩かな
手のひらの山繭に魂うばはるる
碧天をうるほす紅やさるすべり
溪谷に声をころがし河鹿かな
姫螢飛びて拡がる草の闇



槐市集

中 貞 子

さく^{祝詞人}らんぼともに輝く祝膳
緑蔭や不動明王立ち並ぶ
青蛙わたしも自然大好きよ
ひとり居に鉄砲百合の援護かな
月下美人丑三つ時の迷ひかな

中 島 昌 子

実梅挽ぐ空に差し込む肘の皺
今年竹旧家跡地に皮を脱ぐ
田植機の水脈ゆるゆると広ごれり
虹の橋穀倉地帯をひとまたぎ
スワトウのハンカチ使ふ尼御前

中 谷 富 子

白髪をかくす夏帽飛ばしけり
睦み合う蝶にぶつかると不粋者
稲光一瞬笑ひ途絶えたる
長生きを歎く友あり七変化
次の世も矢張り女風薫る

中 西 厚 子

真実と嘘の境目夏霞
父母の待つ虹の彼方へ急ぎをる
帰路急ぐ子等の背中で夏躍る
時鳥夜のしじまを破りをる
梅干の最後のひとつ食べ終へぬ



橋本順子

天守への道あらはなり青嵐
木々の間に植田の水の光りをり
ゆるやかな流れに添ひぬ水芭蕉
地震あとの夏鶯の常のこゑ
街角のジャズに聞き入る薄暑かな

平野多聞

産ぶ声の響む窓辺を薫る風
仏法僧口は仏の出入口
走馬燈迷いの窓を照らしけり
法力に救ふ道なし夏雲雀
みんなは芭蕉を見たと言うて鳴く

藤田美耶子

歴史にも進歩と退歩さみだるる
噴水のアーチくぐりて風新た
緋目高に序列はみへず気ままかな
川風にほどよきしめり花卯木
みなぎりて河骨の花ともりたる

三浦純子

念仏寺の朝のしづけさ沙羅の花
水芭蕉無数のひかり尾瀬の道
夏鶯いつまでも鳴く白鷺城
枇杷の実や皿に大盛日の照りて
梅雨晴れや伊賀の里にてひとり発ち

三木亨

シスレーの絵から脳裏へ風薫る
夏薊とがる棘もつ孤独かな
人の世に媚びず驕らず柿の花
蝙蝠やスーパームーン借景に
反転の井守を朱に落暉かな

安野眞澄

万緑や朝風の音水の音
新茶酌むただ夫とゐるだけのこと
青梅の色づき部屋に匂ひ立つ
黄身二つさはやかかなりし朝の卓
田草取る作務衣の僧や昼の鐘

槐集

高橋将夫選

白鷺は影を落としてなほ白し 守口 三木 享

眸をそらす鶏から選び夏山家
なめくぢら流線形をもて余し

暗渠まで気ままを通し根無草

命なる物のデフォルメ墓

一本の百合を菩薩と親しめり 大阪 平野 多聞

仏縁に心耕す半夏かな

仏法僧迷ひの窓の錆びやすし

標本の蟬の眼にある浄土

枝先に止まらぬ重さ大夕焼

七変化蒼ざめ夜明け迎へたる 岡崎 犬塚李里子

こころざしあれど急がぬ蝸牛

ここからは独りで行けと斑猫 みちおしへ

名越の輪潜りて縹いろの世へ

風と来て常世へ去りぬ瑠璃鷄

水中花咲きつづくるは哀しきと 大阪 江島 照美

悲しみや困難を越え螢飛ぶ

彫刻の肌の温もり夏の月

翡翠や見られて光る珠玉なり

人生のシナリオ実る麦の秋

大滝にたましひぬれて安らけし 藤田美耶子

精霊のやすらぐ気配青葉闇

黒揚羽この街角を楽土とす

白ばらと真紅のばらの讃へあふ

睡蓮のうつろふ色や閉づる夢

大の字に居場所定めしゆきのした 枚方 中 貞子

実梅挽ぐ獣の四肢となりぬたる

蟻螻やいざ鎌倉と云ふ時に

みつせ川その先にある半夏生草

溝萩の風に波打つ浄土かな

銀河往來

◆槐集観照

命なる物のデフォルメ臺 三木 亨

命とは美しいもの思っていたが、そのデフォルメが臺の姿とは。命の本質に迫る怖い一句。

〈白鷺は影を落としてなほ白し〉の句は白鷺の本質が美しく詠まれている、前句と対照的。

〈なめくぢら流線形をもて余し〉の句、蛞蝓を見て流線形を思った人は皆無だろう。しかし、確かに流線形である。そんなにスピードを出すこともないのに。俳諧。

〈眸をそらす鶏から選び夏山家〉の句、「分かる人、手を上げて」と言われると、分らない人は俯いたり目をそらす。目をそらした鶏を山家での料理に選ばうというのだからなんともシニカルではないか。

以上、どの句もその発想、着眼に脱帽。

仏法僧迷ひの窓の錆びやすし 平野 多聞

「迷ひの窓の錆びやすし」のフレーズに曳かれた。迷いは錆び易いらしい。

〈一本の百合を菩薩と親しめり〉と〈仏縁に心耕す半夏かな〉は敢えて解説するまでもなく、仏の多聞の面目躍如の句。

ここからは独りで行けと斑猫まらねこ 犬塚李里子

斑猫はよく道案内と関連付けて詠まれるが、この句は、「ここからは独りで行け」と突き放しているところが味噌。

〈ころざしあれど急がぬ蝸牛〉は作者の思いの代弁であるうか。〈名越の輪潜りて縹いろの世〉の「縹色の世」、〈風と来て常世へ去りぬ瑠璃鶉〉の「常世へ去りぬ」から命・生死への作者の思いが伝わってくる。

翡翠や見られて光る珠玉なり 江島 照美
翡翠を珠玉と見た。「瑠璃も玻璃も磨けば光る」のだが、「見られて光る」であるところに注目したい。

白ばらと真紅のばらの讃へあふ 藤田美耶子
白薔薇と紅薔薇が美を競うように咲いているのだが、「讃へあふ」の措辞がまるでライバルの健闘を讃え合っているようにほほえましい。

蠨螋やいざ鎌倉と云ふ時に 中 貞子
蠨螋はただでさえ鬱陶しいのに、何でまた「いざ鎌倉」という肝心な時に纏わりつくのかという腹立ちが見えてきてユーモラス。〈大の字に居場所定めしゆきのした〉は「居場所定めし」に注目したい。

老の苦難ばかりの手記の山背風 高野 昌代
「老の苦難」、書く方がいいが、読む方はたまらない。〈詩心の宇宙に大地や明易し〉〈大いなる足裏の記憶の田植かな〉〈引力に触れては寂ぶる走り梅雨〉の句は大きく詠まれているところに惹かれた。

迫る一句。

〔竜天にコップの水の震へけり〕の句、竜が天に上る大景をコップの水のかすかな動きに結びつけたのが手柄。

〔海に出て飛花天竺の風に乗る〕はその自由奔放さが魅力。

遙かより祈るほかなし星隴 大塚李里子

震災の際など、救助にかけつけたくともできずに、ただ無事を祈るしかない。まこと、「祈るほかなし」ということが多いのが世の中。

シャボン玉のりて宇宙へ旅の夢 柴田 靖子

次の「連れ舞ひて青き空ゆく春颯」の句と共に、春天がおおらかに詠まれていて心が和む。

さくらさくら余生を飾る並木道 中 貞子

余生を飾る桜の並木道。その精神の位相に共鳴する。

壺に納まる花大根の天地かな 井上 静子

大根の花咲く大地と空。壺の大根の花にはそれらが無い。壺だけがこの大根の花にとつての大地なのだ。住めば都か。

春闌ける短か過ぎたる導火線 中西 厚子

過ぎゆく春を惜しんでいる。惜しむというより残念がついているのだろう。導火線が短かすぎたと悔いが残る。一体何があつたかは読者の想像に任せられている。

花筏一寸法師漕ぎ分けて 竹村 淳

花筏と一寸法師のメルヘンの世界。

裸電球の蔵の美人画幣辛夷 庄司久美子

裸電球のもとでの美人画。場所は蔵。なんとも心にくい景で、思わず採らされる一句。幣辛夷もいい。

〔また固き金色堂の路の暮〕は素直で好感のもてる一句。

植木屋の運んで来たる初夏の風 中島 昌子

爽やかな初夏の風の中を植木屋がやってきた。「植木屋」が実によく効いている。

〔万愚節魔女の一撃くらふ魔女〕は発想がユニーク。

春風や湘南あまねく恋うづく 高野 昌代

湘南へは行ったことないが、確かにそんなイメージがあると
思う。春風と春の波と青春と恋。

〔春惜しむアナログ時計は時惜しむ〕はアナログ時計の長針の動きが目に見えてくる。

弥次郎兵衛花風に酔ひ踊りける 阪倉 孝子

弥次郎兵衛が風にゆれている。花見の酒に酔って踊っているという見立てがユーモラスで楽しい。

〔籠夜やひらがなのごと眠りける〕の「平仮名のような眠り」の比喩もうまい。

宇宙は愛愛は宇宙へ花万朵 岩田 洋子

愛の大きさがよく伝わってくる。花万朵がめでたい。

〔春の闇匂ひの迷路に迷ひ込む〕の句、闇で何も見えないから匂いが頼りなのに、それがまた迷わせるという。春の闇の本質に迫る。